熊本藩の御茶屋の類型について

－街道集落の御茶屋を中心に－

CLASSIFICATION OF OCHA-YAS IN KUMAMOTO-HAN DURING EDO-ERA

－ Especially on Ocha-yas at stage on main road －

岡田 悟*

Satoru OKADA

During Edo-Era there were over 20 Ocha-yas in Kumamoto-Han. Ocha-ya was a lodging used by feudal lord for stay and rest.

Through the examination of historical materials such as plans on 13 Ocha-yas at stage, following results were ascertained;

1) Plan of Ocha-ya was similar to each other among 11 Ocha-yas.

2) 4 Ocha-yas were faced main road and separate from governmental or military facilities.

3) 6 Ocha-yas were detached from main road and combined with governmental or military facilities.

Keywords : Ocha-ya, Classification, Stage, Plan, Site plan, Kumamoto-Han

御茶屋, 類型, 街道集落, 平面, 配置, 熊本藩

1. はじめに

「御料御巡見衆御休泊所絵図」(永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託、以後「御料絵図」と略称)を中心に、天保9年(1838)に幕府より派遣された巡見使が休泊に利用した熊本藩内の施設を対象とした研究を進め^{注1～6)}、日奈久、野津原、山鹿の御茶屋がこの時の巡見使の利用されたことを示すと共に、その平面構成、使われ方、集落との関係等を検討した^{注5)}。

また、前稿^{注7)}では高瀬、川尻、佐敷の御茶屋を対象に同様の検討を行い、日奈久、野津原、山鹿の御茶屋を対象とした検討結果^{注5)}とを総合して、6箇所の御茶屋について以下の3点を指摘した。

- 1) 6箇所の御茶屋には間取り、出入り経路、御茶屋番居家等の点で共通性が高い
- 2) 山鹿、日奈久では敷地が街道に面するが、高瀬、川尻、佐敷、野津原では街道から引き込んだ位置にある
- 3) 山鹿、日奈久では休泊に関係しない施設は敷地に近接して存在しないが、高瀬、川尻、佐敷、野津原では藩の流通、支配、軍事施設が御茶屋と密接な関係で存在する

これら6箇所はいずれも参勤交代に利用される街道上にあった。後述するように熊本藩内には20を越える箇所に御茶屋が設けられていたが、これらの内18箇所は上記6箇所と同様の街道集落であった。さらに、これら18箇所の内上記6箇所含む13箇所では間取り、敷地内の建物構成、敷地と街道との関係等を知ることができ、一部に遺構もあるが、残り5箇所についてはこれらを知る史料が見出せない。

本稿では、これら13箇所の内、既に検討した上記6箇所を除く小川、内牧、大津、久住、南関、的石、鶴崎の7箇所の御茶屋につい

て検討し、最後にこれら13箇所を対象に間取り、敷地内の建物構成、敷地と街道との関係等を指標として、熊本藩の街道集落の御茶屋の類型化を試みたい^{注8)}。

2. 熊本藩の概要と御茶屋の数、所在地

図1に熊本藩領とその周辺を示した。藩域は居城のある熊本を中心とする肥後地域と、野津原、鶴崎、佐賀関等の豊後の飛地とからなる。明和9年(1772)に書かれた『肥後國誌』¹⁾は藩内の地誌であり、各村ごとの書き上げからなる。また、文化8年(1811)の『官職制度考』²⁾は藩の制度を詳説したものである。

藩内に参勤交代に利用される豊前街道、豊後街道、薩摩街道があり、高瀬道も利用されていた^{注7)}。これらの街道を図1に示した。

熊本藩では家老、中老、奉行役らの中枢部の下に勘定局、寺社局、船方等の16局を置いて藩政を行った。16局の中に郡局があり、20名前後の郡奉行に藩士を任じた^{注9)}。一方、藩域を47の手永に分け、それぞれに惣庄屋を任じて各手永に複数の村を属させ、郡奉行が惣庄屋を支配していた。手永の中心地には手永会所が置かれていた。また、川尻、高瀬、高橋、八代を四ヶ町と称して熊本城下と共に16局の中の町局が支配し、宇土、佐敷、鶴崎の3箇所を准町と称して郡奉行が支配していた^{注10)}。これら四ヶ町、准町を図1に示した。

流通の面では、『官職制度考』²⁾に「米廩(コメクラ)」として、東西倉、川尻倉、高瀬倉、八代倉、鶴崎倉、大津倉、久住倉の7箇所が挙げられている^{注11)}。熊本の東西倉を除く川尻以下6箇所を図1に★印で示した。

『肥後國誌』¹⁾には明和9年(1772)の時点で藩内の18箇所に御茶

* 共立女子短期大学生活科学科 教授・工博

Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

屋が存在していたことが記され、『官職制度考』²⁾には「所々茶屋」として23箇所¹⁾の地名が挙げられている。『肥後國誌』¹⁾の18箇所、『官職制度考』²⁾の23箇所の少なくともどちらかに含まれるのは24箇所となる^{注12)}。これらを図1に示し、便宜的に1～24の番号を付した。

3. 街道集落の御茶屋の数、所在地

図1に示す24箇所¹⁾の内、6水前寺御茶屋は現在の水前寺公園であり、熊本城下東郊にある。寛永13年(1636)に国府御茶屋として開設されたもので、藩主一族の「別荘」であった^{注13)}。また、10種山、11柿迫は天領であった五家荘と天草とを結ぶ道上にあったため幕吏の通行があった^{注1)}が、ここに御茶屋が存在したとする記録は『官職制度考』²⁾以外には見出せない。3長洲、9三角、24佐賀間は街道上にない海沿いであった。従って、図1の24箇所¹⁾の内、以上6箇所を除いた18箇所が本稿で対象とする街道集落という本稿の条件に合致する。

これら18箇所を表1の縦軸に番号順に並べ、その地名欄には、本稿で検討する7箇所¹⁾の地名を太字で記し、すでに検討した6箇所¹⁾に既報の注の番号を〔 〕内に付記した。図1においても本稿の7箇所を●印で、既報の6箇所を◎印で表現した。表1の街道欄にはそれぞれの箇所を通過する街道名を記した。

また、表1の18箇所¹⁾の内、四ヶ町、准町に該当する箇所は、表1町欄にそれを記入した。藩内の四ヶ町、准町の合計7箇所¹⁾の内、高橋、宇土を除く5箇所が表1の18箇所¹⁾に含まれている。同様に『官職制度考』²⁾に「米廩」の所在地として挙げられている箇所は、表1蔵欄に○を記した。6箇所すべてが表1の18箇所¹⁾に含まれている。

従って、表1の18箇所¹⁾は参勤交代に利用される街道上にあった点で共通するだけでなく、主要な町、あるいは、蔵の所在地として、藩内統治の面からも重要な役割を担っていたことがうかがえる。

18箇所¹⁾の内、既報^{注1～7)}、および、本稿で御茶屋の平面、配置、町全体を描いた絵図史料、遺構の存在が確認されたものは表1のそれぞれの欄に○印で示し、年号の分かるものは書き入れた^{注14)}。

4. 各所の御茶屋の特徴

既報^{注5、7)}で検討した6箇所と本稿で検討する7箇所を、表2の縦軸に番号順に配列した。表2の横軸には、既報^{注5、7)}の結果を基に、各御茶屋の特徴を示す指標として、御茶屋敷地が街道に面するか引き込んだ位置にあるか、御茶屋敷地内や隣に藩の施設が設けられていたか、いた場合にはどのような施設か、御茶屋番居家が存在するか、する場合はどこに位置するか、玄関は設けられているか、座敷(縁)への出入経路は設けられているかについての欄を設け、既報^{注5、7)}の結果を書き入れた。また、表1との対応が分かるよう、両表を線で結んだ。

4-1 南関 (No. 1、写真1、図2～4)

南関は豊前街道上にあって三池藩との境に位置し、番所が置かれ「侍一人足軽六人」²⁾が配置されていた。「御巡見衆通過沿道絵図玉名、山鹿、菊池、阿蘇地方」(永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託、以後「沿道絵図」と略称)は、書き込み^{注15)}から延享3年(1746)の諸国巡見使が藩内を通過した時の経路を描いたものであることが知られるが、この絵図の南関の箇所を写真1に示した。街道

は南東方向から北東方向へ向かって^{注16)}、集落内で3度屈曲する。中央に「御高札」(写真1a)が描かれる。藩境側の北東端に「南関口御番所」(同b)、「上御番宅」(同c)が向かい合って設けられ、藩境の番所集落としての特徴が良く表されている。

南関御茶屋には遺構があり、保存修理工事が行われ、周辺の発掘調査も行われている。これらの報告書^{4、5)}、および町史^{6～8)}には遺構解体調査、発掘調査の結果の他、絵図、文献をも加えた南関御茶屋についての研究成果が載せられている。それらによれば、史料には南関御茶屋の名は寛永17年(1640)にすでに見られるが、嘉永3～5年(1850～52)に敷地替えをして建替えたことが知られる。

敷地替え前の寛文10年(1670)の年紀がある「南関御茶屋御差図」(熊本県立図書館蔵)の全体配置図、主たる建物の平面図をそれぞれ図2、3に示した^{注17)}。図2によれば、南に入口がある南北25間東西20間の敷地であったことが知られるが、写真1には御茶屋敷地は描かれてなく、位置は不明である^{注18)}。図2では御茶屋敷地内に「御馬屋」「御鷹部屋」があり、表2の敷地内 or 隣欄のその他欄に書き入れた。主たる門である「須戸口」から入ると経路が分かれて2つの「御門」に達する。間取り(図3)を見ると、西の「御門」は「下御臺所」に、東の「御門」は「御玄関」に至ることが分かり、表2の出入経路の玄関欄に○印で示した。玄関からは「御廣間」を介して、「御次」、浴室、雪隠を備えた「御座敷」へと続いている。東側の「御門」から入り「御玄関」の手前で右折すると、塀が途切れた部分から「御座敷」前の庭に達することが出来るが、この経路を強く示すような門や道は描かれてなく、表2の出入経路の座敷(縁)欄には△と記した。

一方、現存する御茶屋遺構は嘉永3～5年の敷地替え後のものである⁴⁾。現在の南関の街路形態は写真1の状態を遺し、御茶屋遺構の位置を写真1dに示した。敷地内の全体の状況や敷地と街道との関係は明確でない^{注19)}。復元竣工平面図⁴⁾を図4に実線で示したが、遺構は床、棚を備えた座敷を中心にした棟と考えられる。この周囲に解体調査時の仕口や基礎の調査を基に作成した嘉永5年時点の復元図とその書き込み⁴⁾を破線、()付きの文字で加えた^{注20)}。式台を備えた玄関棟、納戸、上台所、下台所が復元された座敷棟に付加された構成であったことが知られる。このような平面構成は、図3に見られる寛文10年の御茶屋の構成と基本的に共通している。

4-2 小川 (No. 8、写真2、図5、6)

「沿道絵図」の小川の箇所を写真2に示した。右が北であり、熊本からの薩摩街道が「新町」(写真2a)、「小川町」(同b)を経て「小川筋」(同c)にかかる橋へ向かって南下し、町の中央部に「御高札」(同d)がある様子が描かれている。現在の小川の街路形態は、橋の位置も含めて写真2の状態と同じである。街道から引き込んだ位置に「御茶屋」と書き込まれた敷地(同e)が見られる。

「小川御茶屋」と題された図(永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託)の全体を図5に、建物を図6にそれぞれ示した。原因に年紀、作図契機は記されていないが、各室の利用状況を示す「御用人間」「侍分認所」等の書き込みが天保9年に巡見使が利用した折の「御料絵図」に含まれる各図^{注1～5)}に極めて類似する。また、図6からは玄関、家士詰所、座敷、台所の4部分から構成されていたことが知られ、「御用人間」とある一画は高瀬御茶屋の「御家老間」「御用人間」^{注7)}に類似する。敷地内には「御番所」「御馬建」が描かれ、

表1 街道集落に立地した御茶屋所在地18箇所一覧

No	地名〔既報〕	絵図史料			遺構	町	蔵	街道	備考
		平面	配置	町					
1	南関	移転前 移転後	○寛文10(1670)	○延享3(1746)	○			豊前	
2	高瀬〔注7〕	○		○嘉永7(1854)		四ヶ町	○	高瀬道	
4	山鹿〔注5〕	○天保9(1838)		○延享3(1746) ○宝暦13(1763)				豊前 温泉	
5	植木							豊前	
7	川尻〔注7〕	○		○天保3(1832)		四ヶ町	○	薩摩 船方	
8	小川	○		○延享3(1746)				薩摩	
12	八代					四ヶ町	○	薩摩	
13	日奈久〔注5〕	○天保9(1838)		○延享3(1746)				薩摩 温泉	
14	佐敷〔注7〕			○明和9(1772)		准町		薩摩	
15	水俣							薩摩	
16	大津	○天明2(1782)頃		○延享3(1746)			○	豊後	
17	的石		○		○			豊後	
18	内牧	○						豊後	
19	坂梨							豊後	
20	笹倉(休所)							豊後	
21	久住	○宝暦12(1762)		○文政8(1825)			○	豊後	
22	野津原〔注5〕	○天保9(1838)		○文化10(1813)				豊後	
23	鶴崎		○幕末(姿図)	○寛政11(1799) ○文化11(1814)		准町	○	豊後 船方	
計		10	9	11	2	5	6	17	

表2 街道集落に立地した御茶屋13例の特徴

No. 地名	街道 面	引込	敷地内or隣				御茶屋番 居家	出入経路	
			蔵	奉行役宅	軍事施設	その他(番所は省略)		玄関	座敷(縁)
1 南関 (移転前)						御鷹部屋、御馬屋		須戸口→御門 ○	御門 △
2 高瀬	○	御蔵 10棟				御鷹部屋	表御門脇	○	門御路次口
4 山鹿	○					温泉		○	本門
7 川尻	○	中蔵 東蔵	御町奉行 御役宅			御鷹部屋	瓦御門 (表門)脇	○	瓦御門→塙重御門 御門入口
8 小川	○					御馬建	表門	○	御入門
13 日奈久	○						敷地裏手 (推定)	○	御門→御門→ 中御門
14 佐敷	○			番代此内 二住居		御蔵			
16 大津	○					御鷹部屋、御馬屋、 御道具蔵、御材木蔵、 御惣庄屋詰所、他	敷地裏手 裏御門 近く	○	表御門→御門 △
17 的石	○								
18 内牧	○					御馬屋、御物蔵、 釜屋	裏御門脇 敷地外	○	表御門→中御門 ×
21 久住			郡奉行 在宿ノ宅			御馬屋、御物蔵		○	大御門 御門→御門
22 野津原	○		郡奉行 在宿ノ宅				表御門脇 (推定)	○	表御門→中御門 御成御門 →御駕籠居臺
23 鶴崎	○		郡奉行両 人ノ住宅	御武器蔵	御銀所、御銀蔵、他			○	大門→中門 ○

表3 街道集落に立地した御茶屋13例の分類

併設 街道	併設施設 なし	敷地内 or 隣に併設施設あり				計
		蔵	奉行役宅	軍事施設	その他	
引込	7 小川 18 内牧	7 川尻 2 高瀬 22 野津原	14 佐敷			8 例
面	13 日奈久 16 大津 17 的石				4 山鹿 (温泉)	4 例
不明	1 南関					1 例
計	6 例	6 例			1 例	13 例

図2 「南関御茶屋御差図」(配置)

図4 南関御茶屋遺構復元平面図(文献4より)

写真2「沿道絵図」より小川

写真2凡例

- a : 新町
- b : 小川町
- c : 小川筋
- d : 御高札
- e : 御茶屋

図5「小川御茶屋絵図」(配置)

図6「小川御茶屋絵図」(平面)

図7「大津御茶屋」(配置)

16
大津

写真3凡例

- a : 御高札
- b : 御茶屋
- c : 御客屋(3箇所)
- d : 御蔵
- e : 御蔵(貼紙下)

写真3「沿道絵図」より大津

図8「大津御茶屋」(平面)

図9「の石御茶屋絵図」

図10の石御茶屋遺構平面実測図

17
の石

図11「内牧御茶屋惣図絵図」(平面)

18
内牧
その1

図12 「内牧御茶屋惣図」(配置)

図15 鶴崎略図 (文献11) 志村、佐賀閣へ

写真5 「維新前鶴崎町全景図」より御茶屋部分

写真4 「久住町絵図」

- 写真4 凡例
- a : 御高札
 - b : 御茶屋
 - c : 御門
 - d : 人馬會所
 - e : 御客屋(2箇所)
 - f : 蔵所

図13 「久住御茶屋御絵図」(配置)

- 図15 凡例
- a : 御茶屋
 - b : 御番宅
 - c : 陣馬會所
 - d : 御船會所
 - e : 御船入等(3箇所)
 - f : 御作事所
 - g : 御米蔵

図14 「久住御茶屋御絵図」(平面)

表2の敷地内 or 隣欄には番所を省略して書き入れた。

「小川御茶屋」図には方位が書き入れられ、敷地南側に「本門」が描かれているが、これは写真2で御茶屋敷地に南側からアプローチする道が描かれていることと符合する。「本門」を入ると「玄関」へ達する経路と「御入門」を経て座敷縁が面する「御路地」に達する経路とに分かれ、表2の出入経路欄には玄関欄にも座敷（縁）欄にも○印で示した。

4-3 大津 (No. 16、写真3、図7、8)

「沿道絵図」の大津の箇所を写真3に示した。現在の道路形態は写真3と同じで、中央の「御高札」（写真3a）の所で直角に曲がっている。豊後街道に面する東側の敷地に「御茶屋」（同b）と書き込まれている。御茶屋の周囲には「御客屋」3箇所（同c）、「御蔵」2箇所（同d、e）の敷地が描かれている^{注21)}。

「大津御茶屋」と題された図（永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託）には年が見られないが、天明2年（1782）の年がある別の図^{注22)}と同内容であることから、表1の絵図史料欄には天明2年頃と書き入れた。この図の全体を図7に、建物を図8にそれぞれ描いた。図7で敷地西辺に「表御門」「裏御門」が描かれ、写真3で御茶屋敷地西辺が豊後街道に接する状況に符合する。「表御門」から「御門」を経て「御廣間」に達する。「御門」から「御居間」前の「御路地」へ達することは不可能ではないが、この経路を特別に示す表示はされてなく、南関御茶屋（図3）の場合と同様に、表2の出入経路、座敷（縁）欄には△と記した。平面（図8）は玄関、家士詰所、座敷、台所の4部分から構成され、小川御茶屋（図6）や高瀬御茶屋^{注7)}に共通する。

「裏御門」からは「御門」を経て台所部分へ達すると共に敷地裏手にある「御茶屋番居宅」にも達し、この状況を表2の御茶屋番居家欄に書き入れた。この他に御茶屋敷地内に「御道具蔵」「御馬屋」「御駕部屋」等の付属屋が描かれ、主要なものを表2に書き入れた。

4-4 的石 (No. 17、図9、10)

的石御茶屋番を代々勤めた小糸家の文書が熊本県立図書館に遺されている。嘉永4年（1851）の「覚」（小糸文書、熊本県立図書館蔵）から、元禄10年（1697）に的石御茶屋が設立されたことが知られる^{注23)}。

「的石御茶屋絵図」（小糸文書、熊本県立図書館蔵）を図9に示した。図9に「往還筋」とあるのが豊後街道で、御茶屋敷地はそれに面している。原図に方位は書き入れられていないが、豊前街道、泉水の一部が遺され、これを基に方位を図9に書き入れた。

また、的石御茶屋の遺構があり、その平面実測図を図10に示した。遺構（図10）は床、棚を備えた8畳と次の間12畳とからなり^{注24)}、他の御茶屋における御居間、御次間に当たる2室であったと思われる。遺構は泉水の南西側に、縁が泉水に面する形で位置し、図9で「御茶屋」とある一画に共通する。この座敷部分以外に、他の御茶屋と同様に玄関、家士詰所、台所があったとすれば、玄関、家士詰所はこの座敷と図9の「御門」との間に、台所はこの座敷と図9の「裏御門」との間にそれぞれ設けられる構成であったと推測される。

4-5 内牧 (No. 18、図11、12)

「内牧御茶屋惣図絵図」（永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託）の建物を図11に、全体を図12にそれぞれ描いた^{注25)}。図12の「町筋」が東西に走る豊後街道であり、その北側に引き込んだ位置に敷地が

あったことが分かる。図11には部屋名としては、「御湯殿」「御居間」「御次」「三ノ御間」のみが書き込まれている。「表御門」より「中御門」を入ると、右手に図11で式台と思われる床仕上げが描かれる部分に達する。また、「裏御門」から入ってすぐの棟は台所であったと思われる。

書き込みのない部屋には小川御茶屋（図6）や大津御茶屋（図8）における「御用人間」や「御小姓部屋」に相当する部屋が設けられていたと推測され、玄関、家士詰所、座敷、台所の4部分が設けられていたと考えられる。「御居間」前の「御庭」に達する経路は描かれていない。付属屋として「御番所」「番所」「御馬屋」「釜屋」「御物蔵」が敷地内に描かれ、敷地外の「御裏門」脇に「御茶屋番宅」が描かれ、この状況を表2に書き入れた。

4-6 久住 (No. 21、写真4、図13、14)

文政8年（1825）の年がある「久住町絵図」（個人蔵）を写真4に示した。豊後街道は町中で2度屈曲し、現在もこの道路形態が遺されている。方位は右下が北となる。「御高札」（写真4a）の場所から引き込んだ位置に「御茶屋」と書き込まれた敷地（同b）があり、「御門」（同c）が描かれている。町並を形成する各敷地には間口間数と人名が書き入れられているが、「人馬會所」（同d）とある貼紙の下、および、写真4e 2箇所の敷地に「御客屋」と書かれている。写真4f には「蔵屋」とあり、写真4d 貼紙の下にもさらに貼紙で「蔵屋」とある^{注26)}。

「宝暦十二年三月御奉行衆江調上候写御扣」と書かれた貼紙がある「久住御茶屋御絵図」（永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託）は宝暦12年（1762）の久住御茶屋を描いたものと考えられる。この図の全体を図13に、建物を図14にそれぞれ示した。書き込まれた方位から、図13の「大御門」の位置、向きが写真4cの「御門」に一致し、この絵図に御茶屋敷地全体が描かれていると判断される。

御茶屋の間取り（図14）は、「御廣間」を中心とする玄関、家士詰所、座敷、台所の4部分からなり、小川御茶屋（図6）や大津御茶屋（図8）と同様である。また、「御廣間」と書き込まれた玄関部分に直接達する経路の他に、2つの「御門」を経て奥へ進み座敷部分に達する経路も設けられていたことが図から読み取れる。これに対し、台所の土間へは、「御廣間」や2つの「御門」へ達する経路とは別の「中門」を入れて到達し、川尻御茶屋^{注7)}と類似する。

『肥後國誌』¹⁾の久住の項には「久住御茶屋 此御茶屋内ニ郡奉行在宿ノ宅アリ」とあり、敷地内に郡奉行の役宅があったと考えられるが、この絵図からは確認が難しい^{注27)}。

4-7 鶴崎 (No. 23、写真5、図15)

豊後の飛地にある鶴崎は、熊本からの豊後街道の終点で瀬戸内海に面し（図1）、熊本藩にとって上方、江戸への玄関口としての性格を有していた。熊本藩主の参勤路は豊前街道、豊後街道の2通りがあったが、後者の場合は鶴崎で陸路と海路とを切り替えていた。そのため鶴崎には港が設けられ、『官職制度考』²⁾には16局の一つ船方局に属する船方の所在地として、川尻^{注7)}と共に鶴崎が挙げられ、表1の備考欄に記した。

藩政期の鶴崎を描いた絵図として、寛政11年（1799）～文化11年（1814）と推定される「鶴崎小路絵図」^{注28)}（以後「小路図」と略称）、および、幕末期の様子を描いたと推定される「維新前鶴崎町全景図」^{注29)}（以後「全景図」と略称）が遺されている。図15は「小

路図」を基に作成された略図^{注30)}で、右が北となる。「小路図」に書き入れられた町名、施設名等がこの略図にも記され、「御茶屋」(図15 a)と書き込まれた敷地が描かれている。

『肥後國誌』¹⁾の鶴崎の項には、鶴崎に設けられていた施設が「鶴崎御茶屋 此御茶屋屋敷之内郡奉行兩人ノ住宅アリ 鶴崎番代屋舗 御茶屋本門ノ前通りニアリ 鶴崎御米蔵 同所堀川町ニアリ 鶴崎御船手會所 同所新町筋ニアリ 鶴崎御船入小屋 同所船場近邊ニアリ」と書き出されている。

一方、『肥後國誌』¹⁾が書かれてから41年後に当る文化10年(1813)に書かれた「高田風土記」¹⁵⁾は、鶴崎を含む高田手永の地誌であるが、それには鶴崎に設けられていた施設について

「御茶屋 御囲方一町余ありて、此内に御郡会所、御銀所、御銀蔵、御武器蔵、其外御郡代詰所、御横目、御米銀支配役等の詰小屋もあり

御船会所ハ新町ノ北（中略）御茶屋より北にあたり三丁余あり 御船入ハ御船会所の下にありて（後略）

御作事所ハ山川早の裏（後略）

御蔵所ハ堀川の上にあり（中略）此御囲内に、高田両手永の御囲刃蔵もあり

預会所ハ御茶屋表御門の向構外にあり

御番宅ハ御茶屋表御門の前にあり

御郡屋は御番宅の向にありて、高田両手永の出会所、人馬会所、水夫会所等あり」と

書き出されている。

『肥後國誌』¹⁾、「高田風土記」¹⁵⁾のいずれにも御茶屋が筆頭に記されている。名称、所在場所等から『肥後國誌』¹⁾の「番代屋舗」「御米蔵」「御船手會所」「御船入小屋」が「高田風土記」¹⁵⁾の「御番宅」「御蔵所」「御船会所」「御船入」にそれぞれ該当する。「高田風土記」¹⁵⁾にはこれらの他に「御作事所」「預会所」「御郡屋」が挙げられ、続いて「御船頭丁、御加子丁、御鉄炮丁、七軒丁、城町、奥町などといふ小路ありて、船陸御番人の拝領屋敷三百五十軒余あり」と記されている。

また、鶴崎の町場に関しては、「高田風土記」¹⁵⁾に「御茶屋の北より東にめぐりて出町、西町、新町、本町、堀川町、横町、今新町、山川町、三間町、国宗町という町筋あり」とあり、「小路図」に書き込まれ図15に見られる町名、並びに、『肥後國誌』¹⁾、「高田風土記」¹⁵⁾に書き出された施設の所在地とされる町名が見出せる。

鶴崎を通過する街道に関しては、「高田風土記」¹⁵⁾に「出町、西町、本町、堀川町、今新町をとほり、三間町溝口に出て志村へ舟渡にて佐賀関街道なり、又本町より横町、国宗町をとほり国宗村につゞき、竹田、臼杵への街道あり」と記されている。

これらの史料の記述と図15を対照させると、熊本を發した豊後街道が西から鶴崎へ入り出町、西町を通り、その後本町を直進して大野川を渡って志村^{注31)}へ至り佐賀関へ向う道と、本町から南に折れて横町、国宗町へ進み竹田、臼杵に向う道とに分岐したことが理解され、図15の外側に街道の至る先を書き入れた。この道筋を中心とする町場が「御茶屋の北より東にめぐりて」形成され、御茶屋敷地はこれらの街道に面していない。

「小路図」では御茶屋敷地内の様子は描かれていないが、「全景図」(図15と同様に右が北)中の御茶屋部分には写真5^{注32)}に示すように、敷地四周を堀^{注33)}と土塁で囲まれ、敷地東辺には門と枳形が設けられた様子が描かれ、敷地の大きさは「高田風土記」¹⁵⁾では「方一町余」とされている^{注34)}。

「全景図」の御茶屋部分には建物名等の書き込みは見られない^{注35)}が、敷地内の建物が姿図で描かれ、写真5で中央奥に描かれる最も大きな建物が御茶屋であったと考えられる。御茶屋について「舊茶屋表東向（中略）横に大門南向梁二間半桁三間半（中略）南に廻り二十餘間の板堀にして、茶屋御殿と稱す。入口に中門あり。大玄関南向にして三間、行向大床は三間半間、此處より大廣間桁十二間梁行三間、座並の御禮式は此處にて執行せり。上段三間二間半は藩主の御居間、南向床、西に書院縁あり」とする史料^{注36)}がある。

この記述と写真5とを対照させると、敷地東辺の枳形に面した南向きの門が「大門南向」に、「大門」に入ってから左にUターンする形で達するのが「中門」に該当しよう。そして、中門に入って右折して堀に沿って進むのが「南に廻り二十餘間の板堀」に当ろう。写真5で最も大規模な建物が「茶屋御殿」であり、その南面東端に描かれる突出部が「大玄関」であったと考えられ、大門→中門→玄関という経路をみて取ることが出来る。「大玄関」の他に儀式の場としての「大廣間」、藩主居間であった「上段」の存在が記されているが、「上段」について「南向床、西に書院縁」とされることからこの建物の西端に「上段」があったと考えられ、「茶屋御殿」は東から西へ「大玄関」「大廣間」「上段」という順に構成されていたことがうかがえる。

一方、玄関前から玄関に入らずさらに西へ進むと、門が設けられた堀が2列描かれていることから、この門2箇所を入ると「上段」の縁に達する形であったと推測される。この状況は久住御茶屋(図13)に共通する。

写真5で御茶屋敷地内の東部から北部にかけて、御茶屋より小規模な建物が複数描かれている。『肥後國誌』¹⁾によれば御茶屋敷地内に「郡奉行兩人ノ住宅」があったとされ、これは「高田風土記」¹⁵⁾で御茶屋敷地内にあったとされる「御郡会所」もしくは「御郡代詰所」に当ろうが、これを含め「高田風土記」¹⁵⁾に挙げられる「御銀所」以下の建物が御茶屋敷地内に写真5のように建てられていたと考えられる。中でも「御武器蔵」は他の御茶屋の敷地内には見られないものであり、鶴崎御茶屋に鉄炮、鎗等の武具が備えられていたことを記した史料^{注37)}が見られることから、鶴崎御茶屋が持つ軍事的性格をうかがうことができよう。

番代屋敷は『肥後國誌』¹⁾「高田風土記」¹⁵⁾では共に御茶屋表門前にあったとされるが、「全景図」でも図15 bに示す位置に「御番宅」とある。14佐敷では御茶屋敷地内に番代の居宅があり、町外れに郡代詰所があった^{注7)}のと対照的である^{注38)}。また、「高田風土記」¹⁵⁾で「人馬会所」を含み「御番宅の向」いにあったとされる「御郡屋」は、「全景図」の「陣馬会所」(図15 c)が該当しよう。

「小路図」「全景図」には港に関する「御船会所」(図15 d)、「御船入」等(同 e、3 箇所)、「御作事所」(同 f)が描かれ、「高田風土記」¹⁵⁾には「御船頭丁」「御加子丁」もあったことが記されている。これらを含む鶴崎の集落構成は同様に船方の所在地であった7川尻^{注7)}と共通する。

また、鶴崎は藩の蔵の所在地であり、「小路図」の「御米蔵」の敷地(図15 g)は「全景図」では「米倉」とされ、堀川町にあって『肥後國誌』¹⁾「高田風土記」¹⁵⁾の記述と一致する。2 高瀬、7 川尻では蔵と御茶屋とが空間的に密接に結び付いていた^{注7)}が、鶴崎では蔵と御茶屋とは離れていて、16 大津、21 久住の場合と共通する。

5. 街道集落の御茶屋の特徴

図1に示した24箇所以外にも御茶屋が存在した可能性は否定できない^{注39)}が、その数は限られる。表1の18箇所の内、本稿で検討した13箇所の御茶屋について、検討結果をまとめた表2から、御茶屋敷地と街道との関係、敷地内や敷地近接の施設、平面構成、出入りの経路の点で、以下のような特徴を指摘することができる。

5-1 御茶屋敷地と街道との関係

御茶屋敷地が主要な街道に面するか、街道から引き込んだ位置にあるかについては13箇所中、1 南関を除く12箇所で分り、面する形は4 山鹿、13 日奈久、16 大津、17 的所の4 箇所で、他の8 箇所が引き込んだ位置にあった。特に23 鶴崎では、引き込んだ位置にあった上に堀と土塁に囲まれ、非常に防御的な屋敷構えであった点が注目される。

5-2 敷地内や敷地近接の施設

各所の御茶屋敷地には、馬屋、御鷹部屋、道具蔵、物置等の休泊機能を果たす上で必要な付属屋が見られる例が多く、4 山鹿の温泉はさらにその機能を高めるものと言えよう。休泊機能とは関係しない施設については、1 南関、4 山鹿、8 小川、13 日奈久、16 大津、17 的所、18 内牧の7 箇所ではこうした施設が敷地の中や隣に設けられず、一方、2 高瀬、7 川尻、14 佐敷、21 久住、22 野津原、23 鶴崎の6 箇所では設けられていた。施設の種類としては、

- 1) 蔵 2 箇所：高瀬、川尻
- 2) 奉行役宅 4 箇所：久住、野津原、鶴崎(郡奉行)、川尻(町奉行)
- 3) 軍事施設 2 箇所：佐敷(番代住居)、鶴崎(御武器蔵)

の3種類が見られた^{注40)}。

蔵については、2 高瀬、7 川尻では蔵敷地と御茶屋敷地とが共通の表御門を持ち^{注7)}、一帯性が強い。支配施設4 箇所の内、7 川尻^{注7)}では、御茶屋の台所部分へは御茶屋入口でなく町奉行役宅入口からアプローチする形で、御茶屋と奉行役宅の一帯性が強い状態がうかがえる。21 久住(図13)においても御茶屋玄関への入口と台所への入口とはかなり手前から分かれている。

こうした建物以外では4 箇所御茶屋番の居宅が描かれ、その位置は表門脇2 箇所、裏門脇と敷地裏手各1 箇所であった^{注41)}。

5-3 平面構成

13箇所中、14 佐敷、17 的所を除く11箇所では全体の間取りが、程度の差はあるものの知られ、いずれも玄関、家士詰所、座敷、台所の4 部分から構成されている^{注42)}。これら4 部分の具体的な配列方法や納戸の有無等の点で若干の差異が見られる。

5-4 出入りの経路

同様に14 佐敷、17 的所を除く11箇所すべてで玄関が存在した。一方の座敷縁に上がる経路については、11箇所中8 箇所ではこうした経路の存在が認められ、残る3 例中2 例でも座敷縁に上がる経路が設けられる可能性が指摘された。

6. 結び：類型

表2に挙げる13箇所の御茶屋の検討は、図1に示す24箇所の御茶屋全体を対象としてはいなが、13箇所が表1に挙げた18箇所に含まれることから、検討結果は参勤交代に利用される街道上にある主要な集落に設けられた御茶屋の性格を示唆すると考えて良からう。

上記13例の検討から、御茶屋には間取り、出入り経路、御茶屋番居家等の点で共通性が高い反面、敷地が街道に面するか街道から引き込んだ位置にあるか、および、敷地内や隣に他の施設があるかないか、ある場合には蔵、奉行役宅、軍事施設のどれかの2 点で差異が見られた。

上記2 点の相違点に着目すれば、表3のように縦軸に街道との関係、横軸に併設施設をとって13箇所の御茶屋を分類することができる。これによれば、

- (1) 敷地が街道に面する御茶屋には蔵、奉行役宅、軍事施設が併設されていない

4 箇所：4 山鹿、13 日奈久、16 大津、17 的所

- (2) 街道から引き込んだ位置にある御茶屋には蔵、奉行役宅、軍事施設が併設される例が多い

6 箇所：2 高瀬、7 川尻、14 佐敷、21 久住、22 野津原、23 鶴崎

となり、大きくこの2 類型を抽出することが可能となる。しかし、残る3 箇所については、1 南関では街道と敷地との関係、および、敷地替え後の御茶屋の敷地内構成が明確でなく、8 小川、18 内牧では街道から引き込んだ位置にあるが蔵、奉行役宅、軍事施設が併設されていなかった。

表2の13箇所の内、四ヶ町、准町、船方が置かれた4 箇所の御茶屋はすべて(2)の類型に属している。また、蔵が置かれた6 箇所の内、2 高瀬、7 川尻では蔵と御茶屋が併設されていたが、16 大津、21 久住、23 鶴崎では離れた場所に設けられていた。同様に奉行役宅、番代屋敷と御茶屋との併設状況も場所によって異なっていた^{注43)}。その理由は本稿では明確でなく、今後の課題としたい。

表1に示す絵図史料25点には年代が明確でないものも含まれている。また、表2に挙げる13箇所の内、同一箇所複数時点での状況が知られるのは1 南関のみに限られ、一方、藩政期中に廃止された御茶屋の例も見られる^{注44)}。従って、藩政期全体を通じての藩内の御茶屋の変遷を把握するには十分でない。しかし、本稿で検討に用いた『肥後國誌』¹⁾『官職制度考』²⁾「高田風土記」¹⁵⁾の文献史料、および、表1に示す絵図史料25点の内、年代の分るものは、南関の平面配置図(図2、3)、鶴崎の配置姿図(写真5)を除いて1740 年代～1850 年代に限られる。

本稿では藩内の御茶屋の内、街道集落にあったものを対象とし、時間的にも藩政期全体には及んでいない。今後藩内の御茶屋全体を対象とし、藩政期全体を通じた考察に発展させていく必要があろう。

また、本稿での類型化は形に表れた要素に基づくものであった。こうした類型と御茶屋がどのように利用されたかとを併せて検討することによって、熊本藩の御茶屋の特質をさらに考察したい。

謝辞

本稿をまとめるに当り、史料面で永青文庫、熊本大学附属図書館、熊本県立図書館、竹田市教育委員会、大分市教育委員会、後藤哲氏、得丸善之氏の協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

- 注1) 岡田悟：天保9年の御料所巡見使が休泊に利用した熊本藩の施設について「御料御巡見衆御休泊所絵図」の研究（その1）、日本建築学会計画系論文集第620号、pp. 179～185、2007. 10
- 注2) 岡田悟：天保9年の御料所巡見使が休泊に利用した熊本藩の民家について「御料御巡見衆御休泊所絵図」の研究（その2）、日本建築学会計画系論文集第73巻第632号、pp. 2207～2213、2008. 10
- 注3) 岡田悟：天保9年の巡見使が休泊に利用した熊本藩の商家について「御料御巡見衆御休泊所絵図」の研究（その3）、日本建築学会計画系論文集第75巻第649号、pp. 701～710、2010. 3
- 注4) 岡田悟：天保9年の御料所巡見使が休泊に利用した熊本藩の御客屋について「御料御巡見衆御休泊所絵図」の研究（その4）、日本建築学会計画系論文集第76巻第666号、pp. 1475～1480、2011. 8
- 注5) 岡田悟：天保9年の巡見使が休泊に利用した熊本藩の御茶屋について「御料御巡見衆御休泊所絵図」の研究（その5）、日本建築学会計画系論文集第77巻第673号、pp. 699～707、2012. 3
- 注6) 岡田悟：熊本藩の「豊後筋御巡見衆御休泊絵図」に描かれる施設を利用した巡見使について、日本建築学会大会学術講演梗概集F－2分冊、pp. 635～636、2011. 8
- 注7) 岡田悟：熊本藩の高瀬、川尻、佐敷の御茶屋について－日奈久、野津原、山鹿の御茶屋と比較して－、日本建築学会計画系論文集第77巻第680号、pp. 2445～2454、2012. 10
- 注8) 熊本藩内の御茶屋を対象とした従来の研究としては、間取りを中心とした、森史夫：熊本藩・藩設の御茶屋について、日本建築学会関東支部第41回学術研究発表会梗概集計画系、pp. 309～312、1970 がある。これには熊本藩内の御茶屋全体に対し、共通点として「平面について限って考察してもその差異は、別荘建築とそうでないもの、とのちがいに表れる以外、顕著な特徴はない」とするものの、相違点については「藩設の別邸、別荘、役所の所在地の宿泊施設、そして、茶屋本陣的な宿館、それらを総称して御茶屋とし」とするに留まっている。
- 注9) 郡奉行は郡代とも呼ばれた。『官職制度考』（文献2）では「二百石高職料二十苞」とされ、藩内を14の郡に区分しそれぞれに1～2名、計18名の郡代が配置されていたことが記されている。
- 注10) 『官職制度考』（文献2）に「城下町に准る町 川尻町 高瀬町 高橋町 八代町 是を四ヶ町と云熊本を加へ五ヶ町なり（中略）都て町局に属す、又宇土町 佐敷 鶴崎熊本に准ず、郡代支配す」とある。
- 注11) 各蔵に「支配役 二人 八石二口」以下書記、横目、蔵子、仲仕が置かれたことが記されている。
- 注12) 図1の24箇所内、21久住は『肥後國誌』（文献1）のみに、1南関、5植木、10種山、11柿迫、20笹倉は『官職制度考』（文献2）のみに見られる。また、『官職制度考』（文献2）の23箇所内、20笹倉のみが「休所」とされ、他と区別されているが、休所と御茶屋との差異については明確でない。
- 注13) 『官職制度考』（文献2）の「所々茶屋」の項に「水前寺 園遊は謂御花離宮也 遊宴華園之別荘儲假山水風色」と記されている。
- 注14) 注5では日奈久御茶屋敷地が描き入れられた年代不明の町絵図を用いたが、全く同内容の絵図が「沿道絵図」（注15）に載せられているので、表1には「沿道絵図」の年代である延享3年を書き入れた。
- 注15) 原図には「此絵図延享三年六月仕立候事」と書かれ、凡例として「一黄色 御巡見御通筋見之懸之村色、一赤色 御巡見御衆様江被相付昔（措か）御通筋村付ニ成候村色」と書かれている。なお、この標題は原図には見られず、文献3に記されるものである。
- 注16) 写真1中に、現状と照らし合わせておよその方位を描き入れ、以降の写真2～4、図15にも同様に描き入れた。
- 注17) 本稿で扱う建物平面を描いた絵図の表現方法は図によって様々であるが、間仕切りが壁か建具かを区別して描いている図6、8、および、現状図である図4、10では壁を単線で、建具を2本線で描いた。また、朱書きの書き込みがある図6では、朱書きのものに（ ）を付し墨書きと区別した。墨数が書き込まれている図6では（8）＝8畳という形で書き入れた。各図とも平面図は約1／450で、配置図は図9を除いて約1／1350で描いた。また、配置図には平面図に描かれる建物をハッチングで示し、両図が対照できるようにした。
- 注18) 寛文13年（1673）～元禄9年（1696）の「玉名郡南関之地図」（熊本学園大学附属図書館蔵、年代推定は文献7による）にも御茶屋と書き込まれた敷地は描かれていない。文献5でも「南関御茶屋御差図」について「敷地の位置は明らかではない」としている。

- 注19) 安政4年の「南関御茶屋之図」（文献4所収）や「御馬屋」「御門」を建てたとする記録（文献4所収）から、付属屋を伴っていたと考えられるが、明確でない。現在の御茶屋敷地には遺構の東側に平坦な土地があり、付属屋を建てる余裕はある。
- 注20) 復元竣工平面は嘉永5年時点で復元したものではないため、破線で示す嘉永5年時点の玄関棟、上台所、下台所と、実線で示す復元竣工平面とは必ずしも整合しない。例えば、「（玄関棟）」と書かれた部分の西側に接する部屋は嘉永5年時点には復元竣工平面のような土間はなく畳敷きに復元され、また、納戸は復元竣工平面のような縁がなく直接東側の部屋に接して1間×2間の大きさに復元される。
- 注21) eには「此蔵ハ当時町ニ不残也」とある貼紙の下に「御蔵」と書き込まれた敷地が描かれている。
- 注22) 「大津御茶屋絵図扣」、個人蔵、文献9所収
- 注23) この「覚」は熊本県立図書館作成の小糸文書目録で「御達書綴」とされる文書に含まれている。先祖小糸惣右衛門が豊後から移り住んで以来の代々の事跡を記したもので、元禄8年に当主となった次右衛門の代に初めて御茶屋に関する記事が見られ、「同（＝元禄）十年二月より御茶屋御建方被仰付、同年五月御茶屋番被仰付」とある。
- 注24) 遺構は8畳間のみが古く、聞き取りによれば、次の間は昭和45年に建て替えたものであり、小屋組もその時に改変されている。また、現在は縁の外端にはガラス戸が建てられているが、内戸の痕跡があり、古くは外縁であったと考えられる。
- 注25) 絵図には年紀、作図経緯等は記されていないが、標題や書き込みの状況からは、永青文庫に遺されている他の御茶屋絵図と同様に、御茶屋が建設され、維持運営されていた藩政期の図と考えて矛盾しない。文献10においてもこの絵図の作成年を江戸時代後期と推定している。
- 注26) 「久住町絵図」には多くの貼紙が見られ、文献11ではその内容を検討しながら貼紙をしてその時々状態に合わせ、文政8年が最後の照合の機会であったと推定している。文政8年以前の経緯が明確でないため、表1の絵図史料欄には文政8年と書き入れた。
- 注27) 「久住御茶屋絵図」には図13に書き入れた以外にも門、付属屋等に多くの書き込みが見られ、描かれる建物に「郡奉行在宿ノ宅」に該当する書き込みが存在する可能性があるが、現在、閲覧ができない状態であり、確認が困難である。
- 注28) 個人蔵、文献12所載。原図には敷地ごとに人名が書き入れられ、年代はこれを基に文献12で推定したものである。
- 注29) 個人蔵、文献13、14所載。原図には「昭和六年春日圖之矢野又彦」とあり写しである。文献14にはこの図について「明治初期に描かれた原図の所在が不明となった今では、幕末当時の鶴崎町の詳細を知ることができる唯一の貴重な資料である」としている。本文で以後に検討するように、絵図の内容は「小路図」、『肥後國誌』（文献1）、『官職制度考』（文献2）等と整合する。
- 注30) 文献12所収、大分市教育委員会提供。
- 注31) 「全景図」では図15の南端中央の大野川対岸に「志村」集落が描かれ「ワタシバ」と書き込まれている。
- 注32) 大分市教育委員会提供。「全景図」には図中にイロハ…の符号が書き入れられ、脇にイロハ…に対応する名称が凡例として書かれている。凡例に「ソ 御茶屋」が見出され、写真5は「全景図」で「ソ」と書き込まれた箇所であり、「小路図」の御茶屋敷地の位置に一致する。本文で以後に触れる「御番宅」「陣馬会所」「御船会所」「御船入」「御作事所」「米倉」も同様に「全景図」での位置を知ることができる。
- 注33) 「高田風土記」（文献15）には、鶴崎村の西に接する寺司村の項に村域について「東ハ御茶屋堀にさかひ、南より西ハ（後略）」とあり、堀が存在していたことが記されている。
- 注34) 御茶屋跡は現在は鶴崎高校、鶴崎小学校敷地となり、平成12年に校舍改築を機に試掘調査が行われ、その報告書（文献13）が出されている。
- 注35) 明治時代以降に描かれたと推測される「旧藩時代御茶屋見取図」（個人蔵、文献12所収）にも、御茶屋敷地と敷地内の建物姿図が描かれるが、書き込みは見られない。この図に描かれる敷地の状況は「全景図」の御茶屋部分にほぼ一致する。
- 注36) 文献17に續幸夫「夢の跡はなし」からの引用として載せられている。「夢の跡はなし」については明確でないが、史料名、および「舊茶屋」とあることから、明治時代になってからの回想を記したものと推測される。御茶屋部分に関する内容は本文で以後に検討するように、「全景図」と整合する。
- 注37) 『綿考輯録』（文献18）所収の慶安元年（1684）7月「方々被召置御武

具之覚書」の中に「鶴崎御茶屋御船手ニ被召置御道具也」として「一九拾挺 御番筒三匁五分諸道具并皮笠揃道服共ニ、一廿挺 同三匁玉之御筒諸道具共、一拾八挺 七匁玉より三拾目玉迄之御筒、一五拾挺 拾匁玉之異風御筒諸道具共、一九万四千 玉大小、一十三斤 御葉箱玉葉共ニ、一貳千四百斤 筒葉、一廿張 御弓うつほ共ニ、一五十本 御鑓」とあり、また、「鶴崎御茶屋備付武具」（岡松家文書、文献17所収）には「一、鐵砲 六拾挺（中略） 一、長柄鎗 貳拾四本」と同様の記述が見られる。

注38) 文献14によれば、番代は定員1名役高千石、郡代は定員2名知行高二百石で、郡代は番代の配下とされている。『肥後國誌』（文献1）の鶴崎御茶屋の項に「郡奉行兩人」とあるのは定員2名であることに対応している。

注39) 四ヶ町のひとつであった高橋を描いた「飽田郡高橋町図」（熊本県立図書館蔵）には「御茶屋 此内御町奉行居住」と書き込まれた敷地が見られ、この通りであったとすれば7川尻（注7）と同様の町奉行役宅が同じ敷地内にある御茶屋が設けられていた可能性がある。高橋御茶屋については文献19でも検討されているが、明確になっていない。

注40) 『肥後國誌』（文献1）には14佐敷においても御茶屋敷地内に「御蔵」があったことが記されている（注7）が、本文で前述したように佐敷は『官職制度考』（文献2）に記される「米廩」に含まれていない。2高瀬等の「米廩」に含まれる箇所と区別するため、表2では佐敷の敷地内 or 隣欄では御蔵は蔵欄ではなくその他欄に書き入れ、後述する表3でも同様の扱いとした。

注41) この状況を基に既報（注5、7）で検討した御茶屋6例を再度検討すると、日奈久御茶屋では台所部分と接続された裏手の建物が、野津原御茶屋では表御門脇の建物が御茶屋番の居宅であったと推定され、表2のそれぞれの箇所に「(推定)」と付して書き入れた。

注42) 1南関（図3、4）、18内牧（図12）では家士詰所部分が明確に表示されていないが、図12では本文中に示したように、図で書き込みのない部屋が家士の詰所に用いられた可能性が指摘でき、また、図3、4もこうした使い方に対応できると判断される。23鶴崎では家士詰所、台所の存在を示す史料を欠くが、本文で挙げた「大玄関」「大廣間」「上段」という構成、および、他の御茶屋の平面から、この4部分から構成されていたことが推測される。

注43) 14佐敷、23鶴崎では共に番代が配置されながら、その住居が佐敷では御茶屋内に、鶴崎では御茶屋外に設けられていた。また、2高瀬では町奉行役宅と御茶屋とがそれぞれ町の両端に位置し（注7）、7川尻の場合と大きく異なっていた。

注44) 『肥後國誌』（文献1）に飽田郡五町村の岩下御茶屋は、延宝3、4年（1675、76）頃に開設され享保13年（1728）に家臣に下賜されたことが記され、他に「御茶屋跡（迹）」と記されるものが飽田郡麻生田村、同鹿子木村の項に見られる。

参考文献

- 1) 森本一端（遺纂）：肥後國誌、明和9、青潮社、大正5～6（複製）
- 2) 官職制度考、文化8、隆文館、明治42～43（複製）
- 3) 森田誠一（編）：細川家旧記・古文書分類 永青文庫 正篇、細川藩政史研究会、1969
- 4) 文化財建造物保存技術協会（編）：史跡 豊前街道南関御茶屋保存修理工事報告書 南関町文化財調査報告第9集、南関町教育委員会、2005
- 5) 南関城跡Ⅳ（鷹ノ原城跡）付・南関御茶屋跡周辺遺跡（南関町文化財調査報告第12集、南関町教育委員会、2011
- 6) 南関町史 資料、南関町、1997
- 7) 南関町史 絵図・地図、南関町、1999
- 8) 南関町史 通史上、南関町、2006
- 9) 大津町史、大津町、1988
- 10) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター（編）：永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ、吉川弘文館、2011
- 11) 久住町史、久住町、1984
- 12) 絵図に見る近世後期の肥後領鶴崎（執筆：佐藤満洋） 大分市の文化財第19集、大分市教育委員会、1982
- 13) 鶴崎御茶屋跡 大分県文化財調査報告書第133輯、大分県教育委員会、2002
- 14) 大分市史 中、大分市、1987
- 15) 高田風土記、文化10、個人蔵、文献16所収
- 16) 大分県地方史料叢書1〔9〕、大分県地方史研究会、1982
- 17) 久多羅木儀一郎：豊後鶴崎町史、鶴崎町、昭和12
- 18) 小野武次郎：綿考輯録、天明2、永青文庫蔵、熊本大学附属図書館寄託 綿考輯録 第1～7巻（出水叢書1～7）、出水神社、1988～1991

19) 新熊本市史 通史編第4巻 近世Ⅱ、熊本市、2003

（2013年2月9日原稿受理、2013年6月26日採用決定）